

よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 140



「子どもにも迷惑を掛けたくない」という理由で、安直な「葬送や埋葬」を選択する親御さんが多い。それを延長して考えると、いま、自分が、ここに生きていることを、「迷惑」と感じるからだ。なぜ「迷惑」と感じるのか。それは自分は、何の役にも立っていないと考えるからだ。若い頃は、仕事もし、社会的にも「役に立っている」と感じられたが、老齢になり、年金暮らしともなれば、やはり、子ども世代に支えられるばかりで、自分は「何の役にも立っていない」という感覚で受け止めてしまうのだろう。でも、老齢にならないひとは、誰一人いない。そうすると、日本人は、いや人類は、ことごとく「役に立たなくなる」のだ。この「役に立つか、立たないか」という観念に、我々は、骨の髄まで支配されてきた。そこで眼を自然界に向けてみよう。草花や鳥や昆虫は、役に立っているのかどうか。梅はひとを楽しませるために咲くのだろうか。そうではない。「唯」咲くのだ。だから、ひとは梅を見て感動する。「ひとを楽しませる」ことを「役に立つ」と解釈するのは妄想だ。「役に立つ・立たない」という観念も必要だが、それは資本主義に洗脳された、汚れた感覚だと知っておくべきだ。いのちの〈真実〉は「唯」以外では成り立っていない。

しかし、この選択はレストランでメニューを選ぶような安直な選択ではないので、とても難しい選択ではある。自分が、妄念を振り払うように、エイ、ヤーと力を込めて決断するような選択でもない。自分の力で決断しようとしても、それは選択にならない。そもそも、「念仏」とは、自分で決断しようとする力^{りき}みを阿弥陀さんに、すべて明け渡してしまうことだ。だから、自分では気づかないうちに選ばされていたというのが事実だろう。選ばされていたということ、私は「阿弥陀さんに取り憑^つかれる」と表現している。いままで「自己」が中心の軸となつて、人生を選択して生きてきたと思っていたが、「事実」は選ばされていたのだ。

■「くなりました」という言い方が、他力を反証する■

これは故・竹内整^{たけうちせいいち}先生がよく使われる譬喩だ。「われわれはしばしば、『今度、結婚することになりました』とか『就職することになりました』という言い方をする。そうした表現には、いかに当人『みずから』の意志や努力で決断・実行したことであっても、それは何らかの『おのずから』のなりゆき・働きでそうなったのだというような受けとめ方がある」（『やまと言葉の人間学』）と。

自分たちの意志で結婚を決断したのだが、現実には、そう言い切れないものを感じているから、「くなりました」という言い方が、自然と口をついて出てしまうのだろう。「頭」では自分の意志で選択したと思っけていても、「事実」は、意志だけではなく、さまざまな縁によって成り立つたと感じている証拠だろう。これこそ「他力^{たうりき}」が物事の底辺にあって成り立ち、その上を我々は、あたかも自分で何でも選択して生きているかのような錯覚をして

いるのだ。

竹内先生がおっしゃる「おのずから」が、物事の本質を言い当てている。自己の存在も「おのずから」そのように在るのだ。これが我々を支えている深層の真実だ。しかし、人間の「みずから」という意識は、それを拒否する。どこかに「自己」というものを立て、そこからすべてが始動するように錯覚する。その「自己」とは何かを突き詰めてみれば、雲散霧消^{うんさんむしょう}してしまうのだ。それでも、その錯覚にしがみつき、辛うじて成り立っているのが「人間界」というものでもある。だが、それは表層のことであり、深層とは違う。

■親鸞の「自然^{じねん}」とは■

親鸞にも「おのずから」という表現がある。「自然^{じねん}というは、自^じはおのずからという。行者^{ぎやうじや}のはからいにあらず、しからしむるということばなり」と。この「おのずから」を「しからしむ」と言い換えている。「しからしむ」とは、「そうあるようにさせる」という意味だ。いま外には蠟梅^{ろうばい}の花が健気^{けんげ}に咲いている。まさに「そうあるようにさせられている」姿だ。いのちのルーツを遡^{さかのぼ}ってみれば、私が蠟梅であつてもよかつたはずだ。ほんの少し違っていれば、私が蠟梅だった。まあ、あんなに馥郁^{ふいく}とした香りを放てたかどうかは分らないが。しかし、間違いなく私も、「そうあるようにあらしめられている」存在だ。どこにも「自己」という垣根がない。正確に言えば、「自己」というものは「思い」であつて「実体」ではない。肉体のどこを切り刻んでも「自己」を取り出すことはできない。果たして「自己」とは何なのだろうか。まあ、それが分かったら阿弥陀さんと縁切りだ。

或る日の出来事

西田 純子（京都市北区）

一月九日（二〇二五年）、午前十一時三十分頃か、街で気の重い用事も済み、ただもうひたすら家に帰りたく、四條烏丸の地下鉄に急いだ。改札を通りプラットホームに降りた。ホームは薄暗かった。息せき切って来たので、座って休みたいがと探していると、ホームの中央の京都駅方面行きの側の緑の長椅子ががらんと空いているのが眼に止まった。

珍しいなといささか訝しく思いながら近づいて行つた。一人だけ向うの端の席に高校生らしき女性がからだを90度に曲げて下を向いて居た。靴下でも直しているのだろうと思いつつ、私は手前の端に坐つた。そして、ぼんやりと前方を見ながら、背後の側の国際会館駅ゆきの電車を待った。二人のあいだの席に誰も坐る気配がない。

しばらくしてふと横をむいて向うの端の彼女に眼をやると、まだ同じ姿勢のままである。どうしたんだろう、と不審に思つて彼女の足元のほうを覗ようとすると、何も見えない。じつは私の眼は緑内障の二度目の手術を受けるよう主治医から勧められて一年ばかり経っており、さいきん視野狭窄がさらに進んで来ている。ちようど狭窄の位置に当たるのかもしれない、と諦めた。しかも眼ばかりでなく、耳も、眼の診察時、医師の説明が聴きとり難く、

備えの補聴器で助けられている。なによりも自慢の嗅覚も近頃怪しくなつて来ている。五感の機能が全体的におとろえて、どうしたのと問うのもからだがおもく、口さえも出ない。そこへ京都駅方向に行く電車が入つて来た。どつと乗客が一固まりに流れ出て、私の直ぐ前を、一目散に改札へ昇るエスカレーターに向うべく突進していく。

私がちちらの端、高校生は向うの端、その緑のなが椅子は電車の乗降口の真つ正面に置かれていたのである。少し遅れて降りて来た一人の男性が、自分の真つ正面に見える、そのからだを屈した高校生の足元の何かに気づいたのか、すばやく数個のポケット・ティッシュを彼女の足元めがけて抛つた。すると、その瞬間、「ありがとう」と元気で張りのある若い声が即答した。彼女はかんだ儘ただひとつ自由になる口を使ったのである。あつと気づき、心底、驚いた。その思いがけない両者の行為と即答に惹きつけられ、私は呆然としていたが、ようやく、のろのろと立ち上がり、京都駅方面とは逆の、自分の帰る国際会館駅行きのホームのほうへふらふらと歩いて行つた。電車待ちをしている列のうしろに付いて、さっきの椅子のほうを振り返ると、彼女の屈した姿は見えないで、替わりに頑丈そうな体軀の男性がからだを曲げて、彼女に問いかけているのだろう、頭は見えず、背中の中白く光るゼッケンだけが見えた。

異変を誰かが駅員に通報して、駅の事故がかりの男性がかけて来たらしい。とたん、私の脳裡をしらじらしいという言葉が走つた。それは悔いる反省の自分を厳しく裁く別の自分の声であった。咄嗟にからだ全体に冷氣を浴び、全身が射竦まってしまう

た。そこへ私の乗る電車が入ってきた。混雑きみであつたがようやく席をみつけて坐った。発車し場面は変わったが、悔いる反省の自分をしらじらしいと断罪した自分とそのように裁かれた自分との絡まり合いが脳内に残っていたのか、不思議なことが私の中でおきた。唐突に高校生の時の記憶が脳裡にうかんだ。

それは外国映画で、名も忘れ、ストーリーもなにもかも思い出せないのに、ひとつのシーンだけが心に映っている。教会の薄暗い小さな告解室こっかいしつの中で、ひとりの貧しい男が座って頭を垂れていて俯うつむいてボンボンと罪を告白している姿。男の右横の肩のあたりに小窓があつて、幕で閉まつているがその奥に人の気配がある。神父であろう。その存在も気配だけで声も発しない關係かんけい。高校生私の私にとって初めて眼にした光景だつたのだろう。その場面に突然、七〇年経つて、地下鉄の電車の中で再会した。どうしてそんな記憶の断片がうかんで来たのだらう、と訝いぶかる自分が同時に胸に居た。

さらに継いで現われたのは、これまた高校生の頃に読んだ『緋文字ひもんじ』、小説の名は明確に思ひださなくても、直ぐ出てくる近さの距離、そのごく一部分。内容はたしか、夫が数年外国へ行って留守のあいだにその若い妻が不義の児を産んだ。その罰として住人達から胸に「A」の緋文字（スカーレット・レター）を縫いつけられ淫らな女として晒さらしものにされたのであるが当人はむしろ恥じる事もなくその儘その緋文字を着けて居たと云つたような内容だつたように記憶して居る。そして、住人達の関心はその児の父親は誰かという事であつたが、彼女は黙秘し続けていた。高校生の私はなんと凜々りんりしく強い女性だらうと、私もかくありたい、

と思つていた。

緋文字の女性は沈黙を守り通したが、やがてその父親のほうの名のり出て、みんなの前で懺悔ざんげした。なんとそれは毎週日曜日に教会で説教をし神の教えと倫道徳を説き、ひごろ皆から尊敬されていた若き牧師だつたのである。牧師はなにくわぬ顔をして説教しつづける事の偽善の苦痛に耐えられず、遂に告白し懺悔して自死した。私はその牧師を偽善者だなど思つていたので、偽善の苦しみに耐えられず自死を選ぶのは當然のむくいだらうとみていたのであつた。

しかし今、この二つの記憶が私に突然によみがえるという不思議。そこになにか、その二つの記憶を私に与えずにはおれない、目に見えない配慮があるのではないか、と私は思つた。

あの時、咄嗟とつさにティッシュを投げた、一人の青年の善行の前に、私は頭を垂れ、あのような立派な善行でなくても、せめて口だけでも添える言葉が出なかつた自分に、恥ずかしい自分を晒したもののよと深く悔いた。しかしその瞬間、そんなことを悔いて居る反省の自分に、しらじらしいとするとどく裁く自分が居た。そこに、偽善の自分を感じたからであらう。なにもしないで、そのなにもしない自分を責めて居る私を、偽善者として告発して来たのは、かがんで高校生になにか訊ねているらしい公人の背の白いゼッケンの光であつた。たとえ眼、耳、鼻はなくとも口はあるではないか、とすれば、その口で、私に何かできる事はないかと彼女に問うことができた筈ではなかつたか、と責めている反省の自分、しかも、その口を使わなかつた悪を犯してしまつた自分の罪の苦しさからのがれたいという思いの自分こそが偽善者の自分であると

いう思いが、あの告解室の椅子に私も坐りたいという思いと重なって、あのシーンを呼びよせたのではあるまいか。

しかも、その偽善の毒の自分を吐き出すのを黙って聴いてくださる気配の存在を心の底で渴望していたのではないだろうか。しじらしい反省の自分の偽善の冷気を少しでも払いのけられるにちがいないという渴望が記憶の底からそれを浮かびあがらせる。しかしその幕の向うの気配の存在も実は神ではなくて共に人間ではないか。人間がそういう罪の告白を聴く神の位置を演じることには耐えられるものだろうか。信者のほうは、自分の悪を吐き出して、心は幾分軽くなったとしても、幕の向うの神を演じる神父のほうはどうなのであろうか。とすれば、私は又悪を罪を犯したことになるのか。

なるにちがいない。夫の外国赴任中に夫以外の児を産んでしまった彼女を批難し「緋文字」を胸に縫いつけて晒しものにしていく住人達の、彼女をそのように罰する事によって自分達を道徳堅固の善人にして安心するという深層の心こそが、実は、偽善に通じるものをもっているのではなからうか。むしろそこにこそ怖い罪、自覺のない深い罪があるのではないか。

毎週告解する善良な住人達も、背にゼッケンをはりつけた病人救助の公人も、結局は自分の善を守るといふ懸命な欲望ではないのか。とすれば、皆、同じく自己の善を欲する悪人ではないか。自分の善人性を守るための必死の欲望をあの幕の向うの気配の人は全身に毎回浴びているのであれば、信者側の告解する偽善の行為は常に見せつけられているのである。そうすれば私の眼に映ったあの高校生の出来事全部は、又、告解する人の眼にはそうとも

見えないが、「緋文字」を縫いつけられた彼女と横並びの悪人であつたのである。それはからだを屈した姿勢の彼女のゆがんだ姿勢はとりもなおさず自分の眼にはみえない、私の病氣、私の存在そのものではなかったか。その証拠がはつきりあるのである。

一目散に家に帰りついた私はあわただしく家事をこなし、早い夕食をすませ、今日の家事はなにもかも終わったと、ほっとして入った自室で、私に向つて投げられて来たのは、ティッシュを投げられた瞬間、屈したままの彼女の口から出た、あの「ありがとう」だった。

からだの自由はきかず、その口だけが自由に動かせた彼女は、全身を口にして、そこから「ありがとう」を発したのである。私もあの時、口だけは動かせた筈である。彼女は屈したまま自分は助けを呼ぶ病人だという自覚があつた。しかし私の心はなんの自覚もなく、立ち位置不明の、空っぽの虚、そのものとしてそこに在った。

しかし彼女の「ありがとう」とティッシュの人に応答した自己認識の明解さが、その「ありがとう」の言葉が健康に聞こえ、あかるく正々堂々とした応答になっていた。そして、あのゼッケンの公人の隣に立っていたのは、あれはひよつとしてティッシュを投げた人ではなかったか、と初めて気づいた。それまでは駅のゼッケンの人しか私の視界に存在していなかった。そういえば、ゼッケンの人の左横にもうひとり普通の青年が真つ直ぐ立っていたのだつた。その瞬間、私は、彼女はどれほどの喜びの思いに満たされたことか、と思った。その青年はティッシュを投げただけでなく、係員を伴つてその彼女の前に戻つて来ていたのである。彼

女のアクシデントを見つけた瞬間からずっと関わり続けてくれている青年の存在。これ以上の嬉しさはあるだろうか、と。その「ありがとう」と即答した彼女の口を使って出した尊い言葉が、大音声で私を襲った。なんとうらやましい。

しかし私の苦しみの前には誰一人立つ人はいない。私は一人ぼっちである。淋しい哀しいとうづくまつてしまった。この寂寥の思いが私を冥い洞へ引きずり込んでいった。そして私は絶叫したのである。全身全霊で助けてと叫んでいた。あの牧師も聖職者を演じることから降りて、ただ助けてと神に祈ったにちがいない。たとえ牧師であっても、自分が自分を助けられるわけがない。心の底からの寂寥が彼の自死ではなかったか。自死とは自分が自分を殺すのではない、できる筈という自己への限らない過信を殺すのではないか。

そして告解することによって生きていけるというのは、告解を受ける幕の背後の気配の存在は神ではない。告解する人と同じ人間であるというところに秘密があるのではないだろうか。告解の装置の秘密。なぜ神に直接告解しないのか。どうしてその幕の背後の気配の人を生みだしたかといえ、やはり人間は人のぬくもりが欲しいのである。神を信じていないのである。神を信じていれば直接神にむかって、告解する筈であろう。そんな手間はいらぬ。しかし幕の向うの気配の人を要求するのは人間である。

彼女の前に立った人、ティッシュを抛っただけで去っていく人ではなく、公人の駅員を連れて戻って来て、そばに立ってくれる人、そういう人をもとめているのである。私の心はどこまでも人間を、すなわち体温を求めるのである。体温を求める限りは、神

も佛も信じない自分がそこに証される。だから『緋文字』の作者ホーソンは主人公の心を寂寥の洞窟に閉じ込めて、その他者のぬくもりをもとめる自己の執心を殺したのであろう。

通常は、告解をくりかえして、神にそむいている自己ともしらず、虚しいからっぽの自己を、そんな自己とも知らず、生きていく。逆に、残された口を最大限に使った彼女の即答、「ありがとう」を、健全と聞くころは、口を使う知恵もなくほうけた虚のからっぽの耳が聞き取れる質のものではない。それを彼女の「ありがとう」が教えてくれたのである。「すみません」と即答するのよ、と、持てるちからの口さえおしんだ悪人の私の耳に初めて聞こえて来たのであります。(二〇二五年二月五日「水」午前四時)

合掌

■偶然にも、純子さんに、この原稿を依頼した日、ここに書かれてある「事件」が起こったらしい。そのことをどう受け止め、どう考えればよいのか、気が動転していても原稿依頼を受けられるかどうか分からないとの返事だった。しかし、時間が経ち、ようやく「思い」を「文字」に定着することが叶ったようだ。まあ人間の行為は、必ず受動性で動いているから、自分がどのように行為するかは、自分に知らされていない。そのときどう動くかは、そのときが決めるものである。親鸞も「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」(『歎異抄』第13条)と言っている。だから善良なところも起これば、邪悪なところも起こる。私は、これらのところが起こる「受容器」であり、その他に「自分」という実体があるわけではない。また、イエスにも、姦淫を犯した女性をどう裁くかという有名なシーンがある。ユダヤの律法では、姦

淫罪は死刑で、それも「石打ちの刑」であり、罪人にみんなが石を投げつけて殺すという残酷な刑罰だそうだ。まずイエスの前に姦淫を犯した女性が連れてこられた。そのときイエスはどのような態度を取ったか。もし姦淫した女性を許せば、ユダヤの法律に抵触する。しかし、「石打の刑」を容認したのであれば、イエスの説く愛の教えに抵触する。ここでイエスは二律背反に立たされる。そこで彼は、聴衆に向かってこう語りかける。「情欲を抱いて女を見る者は誰でも、すでに心の中で姦淫を犯したのである。」（マタイ書6:17）と。そして、「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」（ヨハネ書8:12）と。そうしたところ、「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってゆき、イエスと独りの女が残った。」と書かれている。つまり、イエスはユダヤの律法に反することも、また彼の言う愛の倫理に反することもなかった。この「年長者から」と言うところが、実に味わい深い。「年長者」とは罪をたくさん重ねてきた者、さらにその罪を重く自覚している人間のことだ。自分には、とてもその女性を裁く資格はないと自覚しているひとのことだろう。さて、自分はどうかと、自問させられる。まず「姦淫を實際にした人間と、このころの中で思った人間が同罪だ、などとは受け入れられない」と反論するだろう。もう一つは、もし自分が聴衆の一人として、ここに居たら、みんなと一緒に女に石を投げたのではなからうか。法律は法律として、ちゃんと守るべきだという正義論が幅を効かせるだろう。さらに集団には同調圧力が働き、集団の流れに反論しにくい。果たして自分が、この場から立ち去れる「年長者」となれるかどうかだ。

住職

未知との遭遇

足立 峻吾（東京都清瀬市）

私は東京でテクノロジーのコンサルタントをしているものである。さて、このところ、遺伝子研究の分野では遺伝子治療や臓器細胞の再生、また若返りの研究も進んでおり、すでに大人の細胞を生まれる前の状態に初期化する技術も開発されている。また脳神経科学の分野では脳の移植、すなわちコンピュータへ脳の情報をダウンロードする研究が進んでいる。現状、記憶のバックアップをとることはできるが、課題は主体の連続性の担保だそうである。私が私であるという意識の連続性はないが、私の記憶や知識を持った別の意識が生きていくことはできるであろうということである。また、同様に主体の連続性を問わなければ生成 AI を使ってその人の複製であるツインを作ることでもある。これは主体が死んだ後も家族はデジタルとなった主体と変わらず話ができれば、主体は笑ってくれる。ロボットをつけられ好きな形の肉体も持てる。これらが目指すのは死んではいけない社会ともいえないくもない。こうして価値観を未来視点でデフォルメしてみると主体の連続性という価値観に違和感がないだろうか。

この主体の連続という価値観は不思議にも社会で問われることはない。「私が長生きする」価値観はおかしいと叫ぶならそれはむしろ社会的に異常であろう。問われることのないまま人類の動機となっている主体の連続という要求に人類は為すすべもなく支配され止めることができないでいる。



そこで、この価値観について私の事例を通じ一考してみたい。

これはしばらく前に私が遺伝子検査を受けた時の話である。私の父は非常に若くして私が生まれてまもなく末期のがんとなり、闘病し、私が成人するのを見送り亡くなった。闘病の間、何度も手術をして多くの臓器を失い病院に通わなければ生命を維持できなかった。父は明るく夢多き人だったが早々に自分の夢を手放した。父は人前で苦しいと言ったことはなかった。しかしその存在はあまりにも苦しかった。当時はなぜこれほど若くして父ががんになったのかの原因を説明することはできなかった。また父方の私の祖父も若くして同じがんにかかっていた。そのような事情でこれは家系のことであるし自分もいずれそのがんになるだろうと心のどこかで受け入れていた。年齢を重ね、私は父ががんを発症した年齢を過ぎても、まだ体に異変が起きる事はなかった。世の中で遺伝子分野の研究が進展し、仕事ではそれらを扱うことがあったが、今となっては不思議なほどそれらと自分自身を分けて考えていた。受け継いだ因縁と向き合うことを恐れたのか、それらが意

識化される事はなく、またそれと同じくらいに父のことを思い出すことも無くなっていた。



しばらくして、仕事などの縁が重なり、私自身の遺伝子検査を都内のがん専門病院で受けることになった、私の家系では特定のがんが多発しており、私にはそれが疑われるのでそのがんになるような遺伝子異常がないかどうかを調べるというもので、これは遺伝子の情報のうちRNA配列を次世代シーケンシングと呼ばれる近年急速に発展した技術で膨大な解析を一気に行うというものである。父は遺伝性のがんが疑われるが、遺伝子異常があったかは不明である。私の父はその父である祖父から、さらにその祖父の父から遺伝した可能性もある。父母から子へ遺伝性のがんが遺伝する確率は50%であり、これはコインの表か裏がでる確率である。



私にそれらの遺伝子が異常なまま遺伝していれば、すでにそのがんが発症していてもおかしくはないが、それでもまだ異変がないことをどう考えればよいのか。遺伝していなければいけないで、その種類のがんになる心配がないわけではないし想定外の異常が見つかることもある。この検査はがん遺伝子パネル検査と呼ばれ気軽に受けられる金額ではないが、テクノロジへの好奇心を背景に自分自身との対峙をさせる何かを私を後押しした。

さて、病院で検査を受け、数週間後その結果説明を診察室で受けた。その結果はここでは書かないが、結果を聞いてしばらくは感覚がなく、病院の待合室で途方に暮れることになった。



待合室で私と父の遺伝子がこの身体の上で対話をする。ようやくして身体を突き抜けるようにある思いが浮かんた。「父が、私の苦しみを引き受けてくれたのではないか」。そして引き受けたまま沈黙し私のいのちをここまでつないでくれたのだと。さらに祖父や遡ること数十億年をかけここまでこの遺伝子をつないできてくれた多くのいのちの主体から「お前はお前を生きろ」と莊嚴なメッセージが身体に響いてきた。私は自分で今回の結果を引き受けるつもりであつたが、このいのちの主体は私よりも私としてこれまで私を寸分違わず整えてきてくれたのである。そして壮大な世界に圧倒される私をさらに前に押し出した。私はそれに見合うような生き方がとてできると思えず、また自分のいのちに対する関心のレベルがあまりにも稚拙であつたことを思い知らされた。そして自分には生命の延長の要求をするような資格など到底持ち合わせていないとそれを願ひ下げることになってしまった。

いのちの主体は非連続にして連続しこうして私に届き、絶えずいのちを輝かせ続けている。

■足立さんとは、数ヶ月前にお会いして、親しく感じさせてもら

っている。しかし、「テクノロジークンサルタント」をされているとは、まったく知らなかった。それがいかなる仕事なのか、見当もつかない。●私という一つのいのちは、両親という二つのいのちの出会いから生まれる。その二つも、さらに四つのいのち、つまり祖父母の出会いから生まれた。それを遡れば、三十代前の祖先は、十億七千万人を超え、三十三代まで遡ると、地球の全人口を超えてしまう。三十三代前を想うと、全人類は、すべて血を分け合った「親戚」だ。そう考えると、私の身体は、「私のもの」ではない。足立さんが書かれているように、「祖父や遡ること数十億年をかけここまでこの遺伝子をつないできてくれた多くのいのちの主体」が、この身体だ。遺伝子レベルで考えれば、私の父も肺がんになり、母は乳がんを経験しているのだから、私も何らかのがんに罹る因子は持っているのだろう。まあ居直って考えれば、死なないいのちは、この世に一つとして存在しないのだから、それもやむなしか。●「愛別離苦」とは、愛し合う者同士が別れなければならぬ真理のことだが、それは人間対人間は言うに及ばず、「私」と「私という身体」との別れの苦しみなのだろう。しかし、こころは面白いもので、一つのことを、ずっと思い続けることができない。こころに悲しいことが起こっても、ずっと、その悲しみに浸り続けることはできない。あるとき、ふと、その悲しいことを思い出せば、悲しみに沈むのだ。そこに気づくと、私は悲しみが訪れるための「器」だと思われる。私が悲しみを引き起こす主人公だと思っていたが、そうではない。それは逆であって、悲しみが私の上にやって来るのだ。私の上にどんな感情や、思いがやって来るのか。私は、一つの「器」にならなければいいのだろう。 住職

因速寺永代経法要

—人間を考える集い—
兼5月、6月ご命日の集い

5月25日(日)午後1時より厳修

(受付12時半)

今年も永代経法要をお勤め
いたします。

永代経法要とは、私まで

永代に渡ってお念仏を伝えて下さった先祖を偲び、また私から永代に渡

って伝わっていくお念仏の教えを想う

集いです。今年の余興も、真打・古今亭

菊志ん師匠をお招きします！

***詳細は後日お知らせ致します。**

参加冥加志 お一人 3千円

懇親会 お一人 3千円

(参加希望の方のみ)

プログラム

お勤め

住職法話

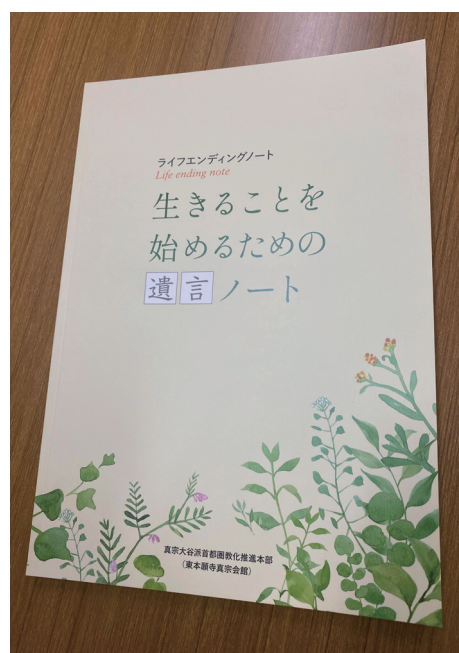
落語

真打・古今亭菊志ん師匠

懇親会



落語：古今亭菊志ん師匠・真打
略歴 1944.4 古今亭円菊に入門
1944.6 前座となり「菊朗」
1948.5 二つ目に昇進
2007.3 真打昇進と同時に「菊志ん」を襲名
2012.2 テキサスを始めとして
アメリカ公演スタート



写真の『生きることを始めるための遺言ノート』には、このように書かれています。

「終活」のイメージは「人生の終わりに向けた活動」と受け止められていましたが、最近では、人生の終わりを考えることを通して「今を生きる」ことに重きを置かれた活動も見られるようになりました。

つまり、「人生の終わり」を考えることは、実は『『終わり』を考える』ではなく、逆に「へいま」を浮き彫りにします。本文は五章立てで、第一章「【現在】どう生きているか」、第二章「【過去】どう生きてきたか」、第三章「【未来】どのように生きたいか」、第四章「【仏事】南無阿弥陀仏の仏事」、第五章「【念仏】念仏の教えに生きる」です。「終わり」とは、現在ただ「へいま」のことなのです。ご興味のある方は、因速寺または、真宗会館(03-5393-0810)まで、お問い合わせ下さい。

◆ご命日の集い◆

毎月のご命日の方を縁とした仏法を聴聞する集いです。
やがて私もこの世を去っていきます。人間の根源的な問い
にあなたならどう答えますか？

開催日…4月27日(日) 5月25日(日) 兼永代経

内容…読経＋住職の法話

冥加志…冥加志は各会で異なります。詳細は後日お知らせ
致します。

◆写経の会◆

毎月1回 午後1時30分～4時頃まで

開催日…3月5日(水) 4月9日(水) 5月7日(水)

6月11日(水)

教材…正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経(上下)

冥加志…初回は三千元(教材費込み) 二回目以降五百円
一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)
をします。お菓子とお茶を飲みながらワイワイ座談をする
会です。写経のみ参加でも構いません。

◆ブッディサロン◆(輪読会)

一冊の本を皆で輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいな
がら、語らう会です。参加されるかたは職種も様々、住
所も様々、何も強制されることはありません。どなたで
も参加自由です。

開催日…3月30日(日) 4月27日(日) 5月はお休み

6月29日(日)

冥加志…お一人千円 ※遅刻、早退自由です♪

◆六組聞法会◆

ろくそもんぼうかい

亡き人と共に救われていくために仏様のお話を聞きましょう。
ご参加お待ちしております。

第三回 2025年4月12日(土) 会場…光圓寺

講師 今泉温資師 午後2時～5時

テーマ『南無阿弥陀仏 生まれたことの意味をたずねていこう』

冥加志 千円也

雑言雑語

この『よびごえ』が発行される頃はもう三月初めぐらいではないかと思う。今年が始まりもう二か月が過ぎ
ようとしている。今年の四月には京都本山、東本願寺で毎年親鸞聖人のお誕生の法要、春の法要が今年は一
五日間、お勤まりになる。東本願寺では春と秋に大きな法要が勤まる中、世間では桜に紅葉、京都でも一
番観光客が殺到する頃になるので、いつも宿を取るのにあぐさくしている。しかし世界最大級の木造建築であ
る本山の大きさには圧倒される。その内陣の御莊嚴として出仕させて頂くのも稀なことである。東京教区で
は四月十四日から教区慶讃法要が五日間に亘って勤まることになっている。私の出身は十四日、十六日、十
八日の三日間に仕出が決まっている。特に十六日は門外不出の念仏の坂東曲が披露される。坂東曲は毎年、
十一月二十八日に京都の本山でしか勤まることのない念仏で、ニュースでは「親鸞が流罪の時に称えた念仏が
由来である」と云われるが、私はそうではないと思っている。そうであるならば「流罪曲」や「越後曲」と言
われてもおかしくない。そうではなく「坂東」というのは茨城の門弟が発祥だと考えている。「おのおの十余カ
国のさかいを越えて身命をかえりみずしてたすねきたらしめたもうおんころさし」『歎異抄』(第二章) 親鸞
聖人に京都で再び会えた慶びを、身体全体で念仏を称えた門弟の歓喜した姿だと思っている。 釋定志

表紙画題



『木瓜の花』

(美しくほけたい輪)

武田美輪 (坊守)

『よびごえ』一四〇号

発行所 因速寺(真宗大谷派本山 東本願寺)

〒136-0074 東京都江東区東砂1-4-10

☎(03) 3644-0986 FAX(03)3648-4391

Email info@insokujii.com

HP https://insokujii.com

編集／発行 武田 定光 Takeda Jyouko

発行日 二〇二五(令和七)年三月一日

Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan